

〔研究論文〕

「結局」の意味と用法

俵 山 雄 司

要 旨

本稿では「結局」という語を、副詞的なものと接続詞的なものに分けた上で、その意味と用法について考察を行った。その結果、両者ともに、結果を表す「事態叙述」と結論を表す「判断叙述」の2タイプがあることが確認された。その他、「結局」について以下の2つの特徴を指摘した。1) 「結局」を含む文の成立には、先行研究で言及されていた否定的ニュアンスではなく、先行文脈中あるいは話者の認識のレベルでの紆余曲折の過程が必要である。2) 「事態叙述」タイプにおいて、副詞「ついに」「とうとう」と比較した場合、「結局」は後件の事態の成立に対しての待ち望みや期待には無関心であり、「結果としてそうならただけだ」ということを中立的な伝達態度で述べるものである。

【キーワード】 結局 事態叙述 判断叙述 否定的ニュアンス 紆余曲折

1. はじめに

私たちが講演を聞いていて「そろそろ終わりそうだ」と感じるときとは、いったいどんなときだろうか。まず、そこまで述べてきたことを総括するような提言が出てきたなど、内容的な指標が挙げられる。また、演者が時計をちらちら見はじめた、突然話すスピードが上がったなど、非言語的・副言語的な指標もあるかもしれない。そして、「結論を申し上げます」「最後に言っておきたいのは」などの言語的な指標もあるだろう。

上記の「結論」や「最後」は実質的な意味を持つ名詞であり、それが上記のような表現の一部として談話の終結部¹で用いられることはある程度予想できる。一方で、本来は「囲碁で、1局を打ちおえること」という意味の名詞でありながら、「いろいろの経過を経て落ち着いた最後。結末」²という意味を持つようになり、現在では副詞や接続詞的に用いられている語に「結局」がある。

1 ここでは「談話」を「話し言葉・書きことばに関わらず伝達のためにことばを用いること」と定義する。「談話の終結部」とは「外形的・物理的に切り出すことの可能な文章・対話・独話全体の末尾の部分、または、それらの部分を構成する内容的なまとまりの末尾の部分」を指している。

2 松村明監修『大辞泉 増補・新装版 (デジタル大辞泉)』による。

この副詞・接続詞的な「結局」について、先行研究では、森田（1977）、グループジャマシイ（1998）が「結論・結果」、森本（1994）が「結論性」ということばを用いて説明しようとしている。下記の例を見ると、「結局」は（1）では話者の表現態度を表す陳述副詞として「結論」を導き、（2）では文頭に出て接続詞として「結果」を導くように用いられている。

（1）日本の援助はいつもヒモつきで、日本の企業、経済に結局プラスになるようになっていく。
（中根千枝『適応の条件』）

（2）本国（本稿筆者注：フランス）の経済界や右翼団体と結ぶコロンと、現地解放勢力との武力闘争は、52年、チュニジアを皮切りに続けられ、第四共和制を破滅の淵に追いこんだのである。

アルジェリア民族解放闘争はその最たるものであり、戦闘の最高時にフランス側の兵力は50万、NATOに予備しておいた全師団をほとんど投入しなければならなかった。

一方、解放勢力側の犠牲もおびただしく、全人口の9分の1に当たる百万人が戦死した。結局、第五共和制の成立後、62年にアルジェリアは完全独立を認められることとなる。
（今津晃『二十世紀の世界』）

しかし、先行研究にはこの副詞的な用法と接続詞的な用法の2つが存在することを明示的に述べているものはなく、この2用法と「結論」「結果」といった意味との対応関係も明らかではない。

また、「結局」は、副詞の分類を行っている西原（1996）や工藤（2000）では、「要するに」「要は」「つまり」などの副詞とともに「まとめ」というラベリングがされているが³、どのような特徴について「まとめ」と言うのかについては言及がない。

本稿では、上記のような問題を整理するために、「結局」の意味・用法の記述を行う。まず（1）のように「結局」が文中で副詞として用いられている場合を取り上げ、その分析を踏まえて（2）のように文頭で用いられる接続詞的な「結局」の分析を行うことにする。その際には、先行研究で言及されている「結局」の持つ「否定的ニュアンス」（後述）についても検討しながら分析を進めていく。

2. 先行研究

「結論」「結果」「まとめ」といったラベリング以外で、「結局」に関する論点を先行研究から抽出すると、以下の2点が挙げられる。

- 1) 「結局」の意味・用法の分類
- 2) 「結局」のもたらす「否定的ニュアンス」

3 その他、森田（1977）、飛田・浅田（1994）、市川（2000）でも「要するに」「つまり」との関わりをうかがわせる記述がある。

以下の2.1節では前者、2.2節では後者について述べている研究を見ていく。

2.1 意味・用法の分類に関して

森本(1994)は、「結局」の意味・用法が複数あることを明示的に述べている唯一の研究である⁴。ここではIketani(1986)を引きながら、「結局」の用法を以下の2種に分類している。それぞれの用法の説明と例文を示す。

・命題指向：

ディスコースで話されてきたことについての結論を示す(話し手が結論的な発言をする)。状態を表す文が後件にくる傾向がある。(例文(3))

・ディスコース指向：

ディスコースの終わりで何が起こったかを示す。行為を表す文が後件にくる傾向がある。(例文(4))

(3) P：あなたはどう思いますか。

Q：もう少し様子をみたほうがいいですね。

P：a. じゃあ、わたしと同じ意見ですよ。

b. じゃあ、けっきょくわたしと同じ意見ですよ。

(4) P：会議はどうでしたか？

Q：反対が多くてずいぶん長引きました。が、

a. 計画を作り直すことになりました。

b. けっきょく計画を作り直すことになりました。

一方、日本語教師・学習者用参考書の茅野・秋元・真田(1987)において、「結局」は以下にあげる①②の2つの項目にまたがって説明されており、明示的ではないものの2つの用法の存在が示唆される。それぞれの扱われ方と例文を以下に示す。

- ① 結果が予測できたり、結果が出た場合に用いるものとして、「ついに」「とうとう」「やっと」「ようやく」などと並べられている。「いろいろなことがあったが、最後に」の意味。(例文(5))
- ② 「言い換えれば」の意味をあらわす言い方として、「つまり」「ようするに」「たとえば」と並べられている。(例文(6))

4 森本(1994)では「結局」はひらがなで表記されている。ここでは、ひらがな表記と漢字表記のものが同一の意味・用法を持つという前提で話を進めていく。

- (5) ショパンコンクールに参加した日本人は30人もいるが、結局入賞したのは2、3人だけだった。
- (6) 課長の意見とは多少違いますが、私の意見も結局これからの経営方針をどうするかということです。

森本(1994)と茅野他(1987)の分類は、着眼点は異なるものの、結果的に重なり合うものになっている。すなわち、森本の「命題志向」が、茅野他の②「『言い換えれば』の意味をあらわす言い方として」の用法に対応し、森本の「ディスコース志向」が、茅野他の①「結果が予測できたり、結果が出た場合に用いるものとして」の用法に対応している。これをごく単純化すれば、「命題志向」と②の用法は「結論」、「ディスコース志向」と①の用法は「結果」というラベリングが可能だと思われる。さらに言えば、「結果」の場合における後件の叙述は「事態」、「結論」の場合における後件の叙述は「判断」という色分けができる。

3節からの具体的分析においては、副詞的用法と接続詞用法という品詞の観点からの分類のそれぞれを、さらに「後件が事態の叙述(以下、事態叙述)」の場合と「後件が判断の叙述(以下、判断叙述)」の場合に分けて「結局」の用法を分析していくことにする。

2.2 「結局」のもたらす否定的ニュアンスに関して

「結局」は、複数の研究において否定的ニュアンスを伴うと言われている⁵。グループ・ジャマシイ(1998)は、「結局」の否定的ニュアンスについて以下のように述べ、望ましい結果を述べる場合の使用は不自然であるとしている。

努力や期待にもかかわらず、人の意思の及ばないところで成立する結果や結論を述べる場合が多く、「ものごとはなるようにしかならない(なかった)」という、やや否定的なニュアンスを伴う。

また、ここでは以下のような例文により、望ましい結果を述べた文が成立しないことを説明している。

- (7) (誤) 猛勉強を続け、結局、彼は一流大学に合格した。
- (8) (正) 猛勉強を続けたが、結局彼は希望した大学に合格できなかった。

これらの例文は、「(7)が誤りとなる理由は「一流大学に合格した」が望ましい結果と解釈されるからである」という意図で示されていると推測される。ただ、(7)の文の自然さに関しては、異論が

5 飛田・浅田(1994)も、「結局」について「ややマイナスよりのイメージの語」と述べ、「納得」「無力感」「焦燥」など、「さまざまの(あまり好ましくない)感情を伴う」と説明している。

ある。筆者の内省では、(7)は完全に誤りとするほど不自然ではなく、文脈をつければ十分に成立するものではないかと考える。

また、市川(2000)では「結局」の否定的ニュアンスについて「ややマイナス結果を表すことが多い」と述べている。ここでは以下のような例文で、「結局」の後件がマイナスの結果でない場合に、やや文が不自然になることが指摘されている。

- (9) 一生懸命がんばりました。しかし、結局失敗しました。
- (10) ?一生懸命がんばりました。それで、結局合格しました。
- (11) 免疫接種をした。しかし、結局、伝染病は撲滅できなかった。
- (12) ?免疫接種をした。そのため、結局、伝染病が撲滅できた。

後件がプラス結果の(10)(12)は、たしかに後件がマイナス結果の(9)(11)と比べると、若干不自然な印象を受ける。ただ、先に述べたように、(7)は後件が望ましい結果であるにも関わらず成立する可能性がある。このことを考えると、後件がマイナス結果でないことが、そのままイコールで不自然さの要因になると考えることは早計である。

上記で紹介したグループジャマシイ(1988)の「否定的なニュアンス」、そして市川(2000)の「マイナス結果」は、用語は異なるが同様の事柄について述べていると思われる。本稿では、以後これを「否定的ニュアンス」ということばで呼ぶこととする。3節からの具体的分析においては、先に示した2分類「事態叙述」と「判断叙述」の場合それぞれについて、「否定的ニュアンス」というものが「結局」を含む文(以後、「結局」文と称する)の成立にどのように関与しているのかも併せて見ていくことにする。

3. 副詞的な「結局」

先にも述べたように「結局」には副詞的な用法と接続詞的な用法がある。本節ではまず副詞的に用いられる「結局」について、特に後件の性質に着目しながら分析する。

3.1 副詞的な「結局」における「事態叙述」

後件が「事態叙述」の場合というのは、後件が、ある時空間に生起した事態を描写しているもので、先行文群で描写されている別個の事態に対しての「結果」と解釈されるものである。2つの例を以下に示す。

- (13) かつてキエフで国際老年学会が開かれた折など、この国を訪れる機会があって、私はターミナル・ケア対策をどのようにやっているか見せてもらえるという学会長の約束をとり

つけ、大いに期待して出かけたこともあったが、結局見せてもらえなかった。

(吉田寿三郎『高齢化社会』)

- (14) この派(本稿筆者注:カルヴィン派)の人は、信用を絶対条件にし、約束は断乎として守ることを至上命令としていた。そういうことで広く一般から信用されていた。このことで、この派に属する人々は、商工業を営む上でたいへん利益を受け、結局この派から多くの資本家が輩出した。

(会田雄次『日本人の意識構造』)

以上の(13)は、「会長の約束をとりつけ、大いに期待して出かけた」ことの結果として「見せてもらえなかった」ということが示され、(14)は「カルヴィン派の人々がたいへん利益を受けた」ことの結果として「カルヴィン派から多くの資本家が排出された」ということが導かれている。

3.1.1 副詞的な「結局」における「事態叙述」の否定的ニュアンス

否定的ニュアンスに関していうと、(13)は、後件は前件との関わりから否定的な内容だと言える。一方で、(14)は、利益を受けた上でさらに資本家が輩出されたということなので、逆に肯定的な内容だと捉えられる。そうすると、グループ・ジャマシイ(1998)や市川(2000)の記述の妥当性に疑いが出てくる。

ただし、このようなある程度長さのある実例を見て、それが帯びているニュアンスが肯定的か否定的かを判断するのは、文脈や筆者の表現意図など多くの要素が複雑に関わっており、容易ではない。

そこで、ここではグループ・ジャマシイ(1998)で挙げられている短い例文や筆者の作例を用いて、否定的ニュアンスの有無が「結局」を含む文の成立にどのように関与しているのかを見ていく。まず、グループ・ジャマシイ(1998)が挙げている例は以下のようなものである。

(15) バーゲンセールにいったが、結局何も買わないで帰ってきた。

(16) 挑戦者も善戦したが、結局判定でチャンピオンが勝利を取めた⁶。

ここで(15)は確かに「バーゲンセールに行く」ことの背後にある「何か良いものを買いたい」という行動が期待はずれに終わっており、否定的ニュアンスだと言える。(16)も挑戦者側の視点で見ると、せっかく善戦した挑戦者が報われず、否定的ニュアンスになっている。しかし、以下の例を見て分かるように、後件が否定的ニュアンスを帯びなければ、必ず不自然になるというわけではない。

(17) バーゲンセールにあって、?結局一枚のシャツを買って帰ってきた。

(18) 挑戦者も善戦し、結局判定で勝利を取めた。

(19) うちのポチは余命半年の宣告を受けたが、結局8年も生きていた。

6 もともとの文は「結局は」となっているが、「結局」でも置き換えが可能であったため、「結局」で示している。「結局」「結局は」の間には何らかの違いがあると思われるが、ここでは立ち入らない。

(17) (18) は前に挙げた2例について、「結局」を残したまま、後件が否定的ニュアンスにならないように改変を加えたものである。(19) は後件が明らかに肯定的ニュアンスの事態である例(作例)である。後の2つ、(18) (19) では、後件は否定的ニュアンスを持たないが、自然な文となっている。では、(17) からはどうしてもわずかながら不自然さが感じられるのだろうか。実は(17) に関しては、以下のような文脈を読み込むことで、よりスムーズに「結局」の使用が可能となる。

[Aさんは明日彼女との初デート。しかし、彼が持っているのは薄汚れたトレーナーのみ。意を決しておしゃれな洋服屋に入ったが、場違いさにいたたまれず店を出る。その後彼は近所の店で開催されていたバーゲンセールにいて…]

ここから「結局」を含む文の自然さに文脈の有無が関わっていることがうかがわれる。結論を先と言うと、「結局」文の成立には、単に文脈があるだけではなく、その中に「紆余曲折」⁷ が読み取れるという要因も関わっている。つまり、(17) 文の不自然さの原因は、「紆余曲折」を含む文脈なしでこの文が提示されていることなのである⁸。この観点から、(18) (19) についても再度考えてみる。

まず、(18) が自然な理由であるが、これは、「挑戦者も善戦し」という部分に含まれる「挑戦者」と「も」という言語要素によって対戦相手のチャンピオンの存在が示唆されることが影響している。これにより、「チャンピオンが優勢だったが、意外にも挑戦者もがんばった」、つまり「紆余曲折があった後の勝利である」ことの想起が容易になったためではないかと考えられる。

次に(19) の成立理由について考えてみる。先に示した(18) には、先行文脈に紆余曲折があって、それが行き着く事態が「結局」の後件で表現されているものであった。一方、(19) は、特にこの文からは紆余曲折を積極的に読み取ることはできないが、前件と後件をつなぐ「～が」を見てわかるように、両者の間に逆接の関係がある。この逆接を「前件から予測されることの否定」と捉えれば、話者の認識のレベルで紆余曲折が含まれていると考えることができる。具体的に言うと、まず(19) の前件「(医者から) 余命半年の宣告を受けた」という事態が起こった場合、通常「半年かそれに近い年月しか生きられない」という予想がなされる⁹。しかし、実際は後件で表現されたように「8年も生きていた」としたら、話者の中では、「予想通り」から「予想がはずれた」状態へと認識が変化していく。これが上記で述べたような文脈上の紆余曲折と同様に処理されるというわけである。

7 「紆余曲折」という用語は、市川(2000)でも使用されている。ただ、市川(2000)は先にも見たように肯定的ニュアンスの文をやや不自然だと判定しており、これが「結局」文の成立に関わるものだと考えていないようである。

8 「結局」文の成立に関係する要因である「紆余曲折」は、名詞としての「結局」の意味「いろいろの経過を経て落ち着いた最後」の「いろいろな経過」の部分に関連付けられるように思う。しかし、「結局」の語史に関しては、本稿の考察の範囲ではないので、ここでは関連の可能性を指摘するにとどめる。

9 逆接の成立条件を論じた研究では、前件とそこから導き出される予想をまとめて「前提」の用語で呼ぶことが多い(西原1985など)。ここでは、「結局」文の成立条件をわかりやすく示すため、「前件」と前件から導かれる「予想」とに分けて扱っている。

この主張の妥当性は、これが後件に否定的ニュアンスを帯びている (15) (16) をも説明可能なことから補強される。

(15) バーゲンセールにいったが、結局何も買わないで帰ってきた。(再掲)

(16) 挑戦者も善戦したが、結局判定でチャンピオンが勝利を取めた。(再掲)

(15) (16) はともに逆接の「～が」を含んでいる。前者は「バーゲンセールに行ったら、そこで何か買うのは当然考えられることだけど、買わなかった」、後者は「挑戦者も善戦して、そこで一瞬勝機があるかなと感じたけれど、チャンピオンが勝った」という認識レベルでの変化があり、それが紆余曲折と同様に処理されたと考えられる。

ここまで述べてきたことは、「結局」文の成立の要因という観点から以下のようにまとめられる。

(20) 「結局」文の成立に関わるのは、当該事態の肯定的・否定的ニュアンスではなく、先行文脈中、あるいは話者の認識のレベルで紆余曲折の過程が読み取れるかどうかである。

3.1.2 副詞「ついに」「とうとう」との関係

「結局」は前述した市川 (2000) や飛田・浅田 (1994) などの記述から、「ついに」「とうとう」との類似性がうかがえる。これに関して、先行研究で提示されていた例はすべて「事態叙述」であった。ここでは、「ついに」「とうとう」との相違点を観察することで「結局」の特徴に迫っていく。

長嶋 (1982) によれば、「ついに」「とうとう」は以下のような特徴を共通に有している。

- 1) ある事態 (状態) の実現に長い時間がかかる
- 2) 実現した事態 (状態) についてそれが普通には実現しないと考えられること

これを前提として、まず先に示した例文で「結局」と「ついに」「とうとう」の間の置き換えが可能な場合を見る。

(21) 挑戦者も善戦したが、{結局/ついに/とうとう} 判定でチャンピオンが勝利を取めた。

(22) 挑戦者も善戦し、{結局/ついに/とうとう} 判定で勝利を取めた。

(23) バーゲンセールにいったが、{結局/ついに/とうとう} 何も買わないで帰ってきた。

(24) バーゲンセールにあって、{?結局/?ついに/?とうとう}一枚のシャツを買って帰ってきた。

(21) (22) は特に問題なく言い換えができる。ただ、「結局」とは異なり、「ついに」「とうとう」を使用した場合は、「簡単には実現できないことを実現した感慨」というニュアンスが出てくる。(23) は「買わないで」と否定になっており何かが実現したわけではない。そのため、感慨というより「普

通は買うのだろうか、そうはならなかった」ことによる「呆れ」や「諦め」のようなニュアンスになるが、「ついに」「とうとう」の使用は問題がない。(24)のみが若干不自然ではあるが、これは「結局」と同様に、何らかの文脈を付けて解釈すれば許容度はあがっていく。例えば「今まで服は全部親に買ってきてもらっていた彼が、今日こそ自分で買いに行こうと決心して…」などの文脈を考えることができよう。

次に、置き換えが不可能な例について見る。

- (25) この派（本稿筆者注：カルヴィン派）の人は、信用を絶対条件にし、約束は断乎として守ることを至上命令としていた。そういうことで広く一般から信用されていた。このことで、この派に属する人々は、商工業を営む上でたいへん利益を受け、{結局/*ついに/*とうとう} この派から多くの資本家が輩出した。

（会田雄次『日本人の意識構造』）

- (26) うちのポチは余命半年の宣告を受けたが、{結局/*ついに/*とうとう} 8年も生きていた。

(25) (26) で「ついに」「とうとう」への置き換えが不可能な理由は、この文あるいは文連続の意味が、「ついに」「とうとう」の特徴である感慨や呆れのニュアンスにそぐわないことである。前者・後者とも、誰かがその結果を予想し待ち望んでいたり、そうなるべきものと期待していたりしていたということではない（少なくとも先行文脈からは読み取れない）ため、それを実現したことによる感慨や実現しなかったことによる呆れ・諦めは表現しにくくなっている。

しかし、ここで「結局」のみが自然であるということは、言い換えれば、「結局」は、後件の事態の成立に対しての待ち望みや期待には無関心で、「結果としてそうなっただけだ」という伝達態度を表現しているということであると言える。そして、この伝達態度は先に見た「ついに」「とうとう」と言い換え可能なものにもすべて当てはまる。

- (21) 挑戦者も善戦したが、{結局/ついに/とうとう} 判定でチャンピオンが勝利を収めた。
 (22) 挑戦者も善戦し、{結局/ついに/とうとう} 判定で勝利を収めた。
 (23) バーゲンセールにいったが、{結局/ついに/とうとう} 何も買わないで帰ってきた。
 (24) バーゲンセールにいった、{?結局/?ついに/?とうとう}一枚のシャツを買って帰ってきた。

上記の文全てにおいて、「結局」文の後件の事態は結果として生じたという読みになり、強い待ち望みや期待があった上でその事態が実現したとは解釈しにくい¹⁰。

10 この強い待ち望みや期待を表現しない（できない）ことが先行研究で言及されている「否定的ニュアンス」とどこかで通じているようにも思える。だが、「強い待ち望みや期待のなさ」が即「否定的ニュアンス」に繋がることはないので、これが直接の要因であるとは言えない。

ここで「ついに」「とうとう」との比較からわかった「結局」文の特徴をまとめておく。ただし、これは「事態叙述」の場合のみにあてはまるものである。

(27) 「結局」文は後件の事態の成立に対しての待ち望みや期待には無関心で、「結果としてそうなるだけだ」という伝達態度を表現している。(事態叙述の場合のみ)

3.2 副詞的な「結局」における「判断叙述」

後件が「判断叙述」の場合というのは、後件が、話し手（書き手）の判断であり、前件を含む先行文群で述べられている事柄を踏まえた上で、その「結論」と解釈されるものである。2つの例を以下に示す。

(28) [ロンドン大学の教師が、外国人もイギリス人と同様に厳しく指導したことを述べた後]
 こうした態度は外国人にとって、(日本の標準からすれば) きびしすぎるようであるが、
結局、信頼感とある種の満足感を与えるものと思っている。

(中根千枝『適応の条件』)

(29) 80年代前半にアメリカ商務省は、アメリカ自身の輸出振興のねらいで総合商社の創設を
 意図したことがあったが、結局日本の総合商社を上手に使った方が得策ということに落
 着いたようである。

(下川浩一『日本の企業発展史』)

(28) の場合は、外国人も厳しく指導することについて「厳しすぎる」という否定的な意見も踏まえながら、「信頼感とある種の満足感を与えるもの」と結論付けている。(29) の場合は「総合商社の創設を意図した」という経緯をたどりつつ、最後に「日本の総合商社を上手に使った方が得策」という結論に達したことを述べている。

また、後件が「判断叙述」の場合の亜種として、以下のような主部一述部構造の中に「結局」が挿入されているものもある。「結局」が節と節との間にある上記2つと比べると、構造が異なることが一目瞭然である。

(30) 物事の出現や存在の特異さは、結局、数の少なさというわけだ。

(森田良行『日本語をみかく小辞典〈形容詞・副詞篇〉』)

今挙げた主部一述部構造の中で用いられる「結局」は、西原(1996)や工藤(2000)が「結局」と同様に「まとめ」の副詞のカテゴリーに入れていた「つまり」「要するに」との置き換えが可能である。一方で、それ以外の「判断叙述」の「結局」では必ずしも置き換えができるとは限らない。

(31) 物事の出現や存在の特異さは、{結局／つまり／要するに}、数の少なさというわけだ。

(森田良行『日本語をみがく小辞典〈形容詞・副詞篇〉』)

(32) [ロンドン大学の教師が、外国人もイギリス人と同様に厳しく指導したことを述べた後] こうした態度は外国人にとって、(日本的標準からすれば) きびしすぎるようであるが、

{結局／*つまり／??要するに}、信頼感とある種の満足感を与えるものと思っている。

(中根千枝『適応の条件』)

(33) 80年代前半にアメリカ商務省は、アメリカ自身の輸出振興のねらいで総合商社の創設を意図したことがあったが、{結局／*つまり／*要するに}日本の総合商社を上手に使った方が得策ということに落ち着いたようである。

(下川浩一『日本の企業発展史』)

先行研究で挙げられていた否定的ニュアンスについてはどうだろうか。上記の例を見てみると(32)はどちらかと言うと、肯定的ニュアンスであるが、(31)(33)は、肯定的・否定的を判断すること自体がかなり困難である。これらの例から見ると、この「判断叙述」の場合は、「事態叙述」とは異なり、肯定的、否定的といったニュアンスは現れにくいことがうかがえる。

また、ここまで述べてきたことから判断すると、先ほど述べた「事態叙述」の特徴である「紆余曲折の過程」を読み取ることは、(32)(33)でも同様に可能である。(32)では「(日本的標準からすれば) 厳しすぎるようであるが」という思考のゆれ動きが表されているし、(33)では「総合商社の創設を意図したことがあったが」という結論に行き着くまでの議論の存在が示されている。したがって、先に示した「事態叙述」の「結局」の特徴の記述は、ここでもそのまま適用できる。以下に先ほど提示した記述(20)を再掲する。

(20) 「結局」文の成立に関わるのは、当該事態の肯定的・否定的ニュアンスではなく、先行文脈中、あるいは話者の認識のレベルで紆余曲折の過程が読み取れるかどうかである。

一方、(31)のような主部一述部構造の中で用いられている「結局」に関しては、それが導く結論までの「紆余曲折の過程」が文脈中で表現されているとは言い難い。ただ、「つまり」「要するに」との比較で考えると、以下に示す通り、直前に「いろいろ意見はあるにしても」など思考のゆれ動きをあらわす表現を挿入することができるので、やはり「紆余曲折の過程」に親和性が高いとは言える。

(31) 物事の出現や存在の特異さは、いろいろ意見はあるにしても、結局、数の少なさというわけだ。

(32) 物事の出現や存在の特異さは、いろいろ意見はあるにしても、{*つまり／*要するに}、数の少なさというわけだ。

以上、ここでは「判断叙述」の「結局」文と「事態叙述」の「結局」文の特徴について、統一的な説明ができることを述べた。次の4節ではここでの特徴づけが、接続詞的な「結局」にも適用できるかについても確認する。

4 接続詞的な「結局」

前節では「結局」を「事態叙述」「判断叙述」の2種類に分類した上で、先行研究で言われている否定的ニュアンスや、その背後にある要因などについて考察を加えた。前節で取り上げた「結局」は、節と節の間や、一文中の主部と述部の間などに出現したもので、品詞的には副詞にカテゴライズされるものであった。4節では、ここまで分析の対象としていなかった接続詞的な「結局」を取り上げて分析を加える。

4.1 接続詞的用法と副詞用法の共通点

接続詞的な「結局」とは、出現位置が文頭であるもので、先行する一文のみならず、その前にある複数の文の内容を受けて、その「結果」としての出来事や「結論」としての主張を導くものである。以下に「結果」を導く「事態叙述」、「結論」を導く「判断叙述」の例を1つずつ示す。

- (33) かれらは、コンピューターで制御した巧妙な装置をつかって、ネズミの眠りを全部(全断眠)、ふかいノンレム睡眠のみ、あるいはレム睡眠のみうばった。こんな処理をうけても、ネズミは猛烈な食欲をしめし、さかんにえさを食べたが、体重は20パーセントほどへり、手足や尾の皮膚に炎症ができ、白い毛は黄ばんでしまった。全身的な衰弱はあきらかだった。

けっきょく、平均すると、全断眠ネズミは約3週間まで、ふかいノンレム断眠ネズミは約6週間まで、レム断眠ネズミは約5週間までしか生きのびることができなかった。

(井上昌次郎『睡眠の不思議』)

- (34) 濃口しょうゆに比べ、薄口しょうゆは、香り、味の成分とも、大幅に押えられている。色がうすいだけではないのである。生ぐさみを消す力はあるが、薄口しょうゆだけでは、しょうゆとしての個性は料理にあまり強くでてこない。そこで、薄口しょうゆを使うとともに、他のうま味成分、たとえば各種のダシや味のでる食品をいろいろ併用していく方法がとられるのである。

結局これは、単一の素材を単一の強い味で料理していたのでは飽きてしまうので、料理によって変化がつけられるように、色、味、香りを押えた薄口しょうゆのようなタイプが求められたからであろう、(以下略)

(河野友美『たべものと日本人』)

両者ともに、「結局」が最終文の文頭で用いられている。「結局」を含む文は、(33)では先行文脈で

説明されているネズミを使った実験の「結果」を述べており、(34)では香りや味が強くない薄口しょうゆが求められた理由を、「結論」的に提示している。

副詞用法のところでも述べた「結局」の「紆余曲折」の過程という特徴は、ここでも共有されている。前者では、ネズミはさかんにえさを食べたにも関わらず、体重が減り、皮膚の炎症、毛の黄ばみが出るという紆余曲折が表されている。後者は、文脈からはっきりとした紆余曲折は読みとれないものの、前節で説明した主部―述部構造中での「結局」と同様に「いろいろ意見はあるにしても」をその直前に挿入できることから、「つまり」「要するに」とは異なり、思考のゆれ動きを十分含み得ると言える。

また、「事態叙述」の「結局」文の特徴として挙げた「後件の事態の成立に対しての待ち望みや期待には無関心であり、「結果としてそうなっただけだ」という伝達態度を表現している」に関しても「事態叙述」の(33)で確認できる。ここでは、提示された実験の結果についての「待ち望みや期待」をうかがわせるものを当該文や先行文脈から読み取ることはできず、実験結果が淡々と報告されているような印象を受ける。

4.2 接続詞的な「結局」における前後件間の論理関係

接続詞は、一般的に先行文（あるいは文群）と後続文（あるいは文群）の間の論理関係を示す標識であるとされている。ここまでの議論で、「事態叙述」の「結局」は「後件の事態の成立に対しての待ち望みや期待には無関心であり、「結果としてそうなっただけだ」という伝達態度を表す」ことがわかったが、それが接続詞的な「結局」において、先行文と後続文間の論理関係としてどのように表れているか、また他の接続詞とどのような関係にあるのかについて詳しく見ていく。

手始めに、接続詞的な「結局」の先行文と後続文間の論理関係について、否定的ニュアンスという観点から言及している市川（2000）の記述の検討を行っておく。以下は、市川の示した文である。なお、ここで示している文は

- (35) 一生懸命がんばりました。しかし、結局試験に落ちました。
- (36) ? 一生懸命がんばりました。それで、結局試験に合格しました。
- (37) 免疫接種をした。しかし、結局、伝染病は撲滅できなかった。
- (38) ? 免疫接種をした。そのため、結局、伝染病が撲滅できた。

市川は(35)(37)が自然で、(36)(38)がやや不自然な文連続になっているのは、文の否定的ニュアンスの有無が関連していると説明している。一見この分析は妥当なように見えるが、本稿の立場では、(36)(38)が不自然になるのは当該の文連続に否定的ニュアンスがないからではなく、先行文と後続文の関係から「後件の事態の成立に対しての待ち望みや期待」が読み取れるため、「強い待ち望みや期待がない」という「結局」文成立の条件をクリアしていないからとなる。

さらに、ここでもう一つ考えておかなければならないのは、「しかし」との兼ね合いについてである。

(35) (37) では、「結局」の前に「しかし」が挿入されているが、以下のように「しかし」を取り除くと、不自然な文連続になってしまう。

(39) 一生懸命がんばりました。結局試験に落ちました。

(40) 免疫接種をした。結局、伝染病は撲滅できなかった。

これは、佐久間 (1992) などが述べている、「逆接の接続詞が現れる環境では、接続詞が省略された場合に文連続の成立が難しくなる可能性が高い」ことと関係している。言い換えれば、逆接という論理関係はそれほど接続詞のような形態的指標に依存しており、「結局」のみではその関係を支えきれないということである。

つまり、「結局」のみで支え切れる文連続というのは、後件の事態の成立に対しての待ち望みや期待には無関心であり、「結果としてそうなっただけだ」という関係だということになる。このことは以下のように文を改変すると自然になることからわかる。「結局」の後続文は (39) (40) と同じままである。ここでは、先行文脈に紆余曲折の経過が含まれるように情報を足してはいるが、「結局」のみで文連続が成立している。

(41) 彼は、勉強するふりはしていたが、親には黙ってゲームセンターやカラオケで遊びほうけていた。結局、彼は試験に落ちた。

(42) 一時は撲滅の一手前まで迫った伝染病であったが、その後防疫体制が十分でなかったA国で再度大流行をするなど、網の目を縫うようにウィルスは生き延びた。結局、20世紀において伝染病は撲滅できなかった。

ここまで、「事態叙述」の「結局」における先行文・後続文間の論理関係について見てきた。次に、接続詞的な「事態叙述」「判断叙述」の「結局」と他表現との入れ替え可能性について見てみる。まず接続詞的な「事態叙述」の「結局」を取り上げる。これらの中には、以下のように「その結果」「だから」など因果関係をあらわす接続詞との入れ替えが可能なもの、そうでないものが存在する。

(43) 休憩時間になる。斎藤先生は、借りた本を返しに来る生徒や、また借りて行く生徒などの応対で忙しい。{結局/その結果/だから}、先生は休憩が取れない。

(森清『選び取る「定年」』)

(44) 本国 (本稿筆者注：フランス) の経済界や右翼団体と結ぶコロんと、現地解放勢力との武力闘争は、52年、チュニジアを皮切りに続けられ、第四共和制を破滅の淵に追いこんだのである。

アルジェリア民族解放闘争はその最たるものであり、戦闘の最高時にフランス側の兵力は50万、NATOに予備しておいた全師団をほとんど投入しなければならなかった。

一方、解放勢力側の犠牲もおびただしく、全人口の9分の1に当たる百万人が戦死した。{結局／*その結果／*だから}、第五共和制の成立後、62年にアルジェリアは完全独立を認められることとなる。
(今津晃『二十世紀の世界』)

(43) では「その結果」「だから」との入れ替えが可能になっている。ただ、当然それぞれの形式を選択した場合の意味は異なる。「結局」の場合、やはり「紆余曲折の経過」の後に「結果として…」というニュアンスが前面に出てくる。一方、(44) の場合、「その結果」「だから」との入れ替えは不可能である。後続文で表現される事態は確かに先行文脈の内容を踏まえてはいるが、因果関係のようなはっきりした論理関係はここではなく、やはり「その結果としてどうなったか」を示しているだけのものである。

続いて、接続詞的な「判断叙述」の「結局」について見る。これらはほぼすべてが「つまり」「要するに」など換言の意味を持つ接続詞との入れ替えが可能なものである。以下に入れ替え可能なものの例を2つ示す。

(45) 聖書の言葉にあるように「はじめにロゴスありき」、論理的に正しいことは正しいのだ、という信念が古今東西、ヨーロッパでも日本でもありました。学習もそういうものだ、という思い込みはひじょうに強かったし、今も強い。

{けっきょく／つまり／要するに}教育の歴史というのは、いかにイメージを排除して抽象化するか、抽象的な論理に還元できるかという歴史であったということが出来ます。より単純なものに還元し、最後は論理にするわけです。

(品川嘉也『全脳型勉強法のすすめ』)

(46) 市民社会では、ブルジョアジーが経済的実力を背景に、政治の方向まで決定するが、日本の社会は、なかなかこうはいかない。それは、たとえ実力があっても、集団のなかで安定した支持が得られなければ、目的は達成されないだろうという一般的理解があるからである。自分の目的のために他者を手段にかえようとしても、誰もがそう思っているから、容易ではない。

{結局／つまり／要するに}、力づくで押さえることになる¹¹。

(中川剛『日本人の法感覚』)

上記2例でも、「結局」を選択した場合と、他の表現を選択した場合の意味にはやはり違いが感じられる。「結局」の場合は、「いろいろ意見／異論／障害があるにしても」という含みが読み取れるのに対し、「つまり」「要するに」はストレートに結論に向かうという印象を受ける。先行研究において「結局」は「つまり」「要するに」と同様に「まとめ」というラベリングがされてきたが、上記の観察を踏

11 この例文では、「その結果」「だから」など因果関係の接続詞との入れ替えも可能である。したがって、「事態叙述」と「判断叙述」との中間的な例だと言える。

まえると、「まとめ」と言えるのは、接続詞用法のうち、「判断叙述」の「結局」であると言えよう。

以上、接続詞的な「結局」が表す先行文・後続文間の関係や、他表現との関連について述べてきた。ここで言えるのは、「結局」は接続詞として機能することはできるが、「逆接」や「因果関係」のように前後件の関係性をはっきりと表示するようなことはせず、あくまで「結果としてどうなったか」「結論としてどうなったか」を示す語であるということである。そのため、2文だけでは関係が安定せず、成立のために「紆余曲折の経過」を持つ先行文脈の存在が強く要求されるのである。

5. おわりに

ここでは「結局」という語を取り上げ、それを大きく副詞的用法と接続詞的用法に分けて、考察を行った。その結果、両者ともに、結果を導く「事態叙述」と結論を導く「判断叙述」の2タイプがあることが確認された。また、「結局」を含む文の成立には、先行研究で言及されていた否定的ニュアンスは無関係であり、「先行文脈中、あるいは話者の認識のレベルで紆余曲折の過程が読み取れる」ことが必要であることがわかった。また、「事態叙述」タイプに関しては、副詞「ついに」「とうとう」との比較から、「結局」が後件の事態の成立に対しての待ち望みや期待には無関心であり、「結果としてそうなっただけだ」ということを中立的に伝えるものであることが明らかになった。

「結局」は「紆余曲折の後、結果（結論）としてどうなったか」を中立的に表すため、最終的な意見や主張に向けて筆者が強く収束させていく談話というよりは、その主張の前提となる事態や判断を説明する部分や、淡々とした経緯の説明の部分に用いられることが予想される。今後は、「結局」と「このように」「こうして」など談話の最後で用いられやすいと言われている表現などとの対照も視野に入れて分析していくことで、談話終結の類型と原理について考察を深めていきたい。

参考文献

- 市川保子 (2000) 『続・日本語誤用例文小辞典 接続詞・副詞』, 凡人社
- 茅野直子・秋元美晴・真田一司 (1987) 『外国人のための日本語例文・問題シリーズ1 副詞』, 荒竹出版
- 工藤浩 (2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法3 モダリティ』, 岩波書店, pp161-234.
- グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』, くろしお出版
- 佐久間まゆみ (1992) 「接続表現の省略と用法」『国文』77, お茶の水女子大学国語国文学会, pp63-74.
- 長嶋善郎 (1982) 「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」『ことばの意味3 一辞書に書いてないこと』, 平凡社, pp170-177.
- 西原鈴子 (1985) 「逆接的表現における三つのパターン」『日本語教育』56, pp28-38.
- (1996) 「副詞の意味機能」国立国語研究所編『日本語教育指導参考書19 副詞の意味と用法』, 大蔵省印刷局, pp49-80.
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』, 東京堂出版
- 森田良行 (1977) 『基礎日本語 意味と使い方』, 角川書店
- 森本順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』, くろしお出版

横林宙世・下村彰子（1988）『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 6 接続の表現』荒竹出版

Iketani, kiyomi. (1986) "Selected Sequences Signals in Japanese: A Semantic Analysis." MA Thesis. Australian National University.

用例出典

中根千枝（1972）『適応の条件』講談社／今津晃（1974）『二十世紀の世界』講談社／吉田寿三郎（1981）『高齢化社会』講談社／会田雄次（1972）『日本人の意識構造』講談社／下川浩一（1990）『日本の企業発展史』講談社／森田良行（1989）『日本語をみがく小辞典〈形容詞・副詞篇〉』講談社／井上昌次郎（1988）『睡眠の不思議』講談社／河野友美（1974）『たべものと日本人』講談社／品川嘉也（1987）『全脳型勉強法のすすめ』講談社／中川剛（1989）『日本人の法感覚』講談社

以上、『CASTEL/J CD-ROM V1.3』（日本語教育システム研究会）より

The meaning and usage of *Kekkyoku*

TAWARAYAMA Yuji

In this paper, I examine the meaning and usage of *Kekkyoku*, which can be used both as an adverb and as a conjunction. The analysis indicates that it can be used for two types of purposes in each usage: event description type, which presents a result, and recognition description type, which presents a conclusion.

In addition, I point out two features: 1) requirement of a sentence including *Kekkyoku* is not negative nuance as mentioned in former studies, but is a process with many twists and turns in former contexts or ones consciousness level, 2) in the event description type, in contrast to the adverbs *Tsuini* and *Toutou*, *Kekkyoku* is indifferent to desire or hope for occurrence of the event, and is used to state a result in a neutral manner of communication.